

ぶんぎょうの 図書館だより

文京区立図書館報 第122号
編集・発行
文京区立真砂図書館（中央館）
〒113-0033 文京区本郷4-8-15
☎03-3815-6801
発行日 平成14年3月31日

印刷物番号 I 0 1 0 1 0 6 9



森鷗外生誕140周年に思う

長谷川 泉（森鷗外記念会理事長）

森鷗外記念館が、全世界で3館になる時代である。

第1に旧東ベルリンで鷗外が居住していた場所。第2に鷗外の生地である島根県の津和野町。第3に鷗外が永く暮らし、そこで生涯を終った旧観潮楼の跡。ただし、団子坂上の

この場所は、鷗外記念本郷図書館があり、その1階に記念室があるわけであるが、その建て替えに際し記念館になることになっている。このように、内外に記念館3館を持つのは他の日本人にはないことである。

次に、外国人が外国語で書き、その外国で出版に及ぶ森鷗外評伝が7著になるという盛儀である。

アメリカ1著。イギリス1著。ドイツ2著。ロシア2著。中国1著。（ただし、北京で李徳純氏が執筆中の中国語版だけがまだ未完成である。）日本人で最初のノーベル文学賞を得た川端康成でも、中国で出版された中国語の評伝があるだけである。そのことを思うと、国際的にいかに鷗外の評価が高いかがわかるというものだ。

1999年には、ゲーテ生誕250周年とドイツの首都ベルリン復帰を記念して森鷗外記念会では私たちが大挙ベルリンを訪れた。2000年には、ベルリンの森鷗外記念館館長のクラハト博士夫妻が初めて鷗外記念本郷図書館を訪れ、相互の協力を誓い合った。また、これまでも多くの場面で、国内の関係団体同士の協力関係が築かれてきた。

このように、国内でも国際的にも、交流の積み重ねが続いているのである。今後の更なる発展を願っている。

長谷川 泉氏 略歴

大正7年生まれ、東京大学卒、同大学院終了。文学博士。文京区西片在住。

森鷗外記念会理事長。近代文学とくに森鷗外や川端康成の研究者として著名。久松潜一賞、サンケイ児童文学賞等を受賞。学習院大学講師・東京大学講師・清泉女子大学教授等として近代文学を講じてきたほか、医学書院代表取締役や、詩人としても活躍されている。

主な著書に、『近代への架橋』『近代日本文学評論史』『森鷗外論考』『川端康成論考』、詩集『心象風景』等。『長谷川泉著作選』（12巻）がある。

また氏は、「近代文学の研究者として第一線で活躍されており特に森鷗外に関する研究・顕彰活動については日本のみならず海外においても高い評価を得て」いるということで、平成13年度に創設された文京区民栄誉賞においても、第1回の受賞をされている。

目次

- * 森鷗外生誕140周年に思う…………… P1
- * 生誕140周年記念特別展示に見学者の列… P2～3
- * 二つの記念講演会にも「感激！」の声 … P4
- * 文学講演会の記録 …………… P5～6



森鷗外生誕140周年記念事業

生誕140周年記念特別展示に見学者の列

明治の文豪森鷗外は、60年の生涯の後半30年間を文京区千駄木で過ごし、この地で多くの傑作を生み出しました。軍医としての衛生学の執筆を初め、小説・詩歌の創作、翻訳、演劇、考証と多方面に発言し、作品を発表しました。

劇作家・詩人の木下杢太郎は、鷗外を「テエベス百門の大都」と称えました。テエベスとは、壮麗な門が多く立ち並ぶ古代エジプトの都市の名前です。杢太郎は、鷗外の様々な分野の才能を、この門の数にたとえたのです。

平成14年は、明治の文豪森鷗外が生まれてちょうど140年の記念すべき年にあたります。それを記念して鷗外記念本郷図書館では、各種の行事を企画いたしました。そのうち平成13年度事業として終了した企画について、その時の模様をお知らせします。

特別展示 作品にみる森鷗外の生涯

会場：文京シビックセンター1階 アートサロン

1月22日(火)～26日(土)

鷗外の生涯を8つの時代(コーナー)にわけ、それぞれの時代を代表する作品と、自筆原稿、日記、書簡、手回り品などの遺品資料でたどっていくという展示でした。普段は区立鷗外記念本郷図書館の鷗外記念室に保管されている各種の資料を、今回初めて館外へ持ち出し、より多くの人が集まりやすいシビックセンターで開催しました。予想以上の見学者の列に、改めて鷗外の偉大さを感じる展示会となりました。

また、同会場内では、ビデオ「記録・森鷗外」、紙芝居ビデオ「山椒大夫」の上映を行い、さらに、森鷗外記念会の協力を得て、第一線で活躍中の鷗外研究家の先生方に解説をお願いしました。

コーナーの概要

◎代表する作品

○主な展示資料

1. 幼年の頃

◎キタ・セクスアリス

○自紀材料

2. 東大から軍へ

◎雁 「カズイシチカ」

○大学時代のノート

3. ドイツ留学時代

◎「舞姫」

○ピールジョッキ、RMモノグラム、独逸日記

4. 啓蒙の時代

◎「細木香以」沙羅の木

○観潮楼合評会の図(依田学海画)、



【会場風景】



【特別展ポスター】

志がらみ草紙、観潮楼模型(文京ふるさと歴史館蔵)

5. 小倉時代

◎「鶏」「独身」「二人の女」

○小倉日記、賀古鶴所宛鷗外書簡、即興詩人

6. 日露戦争の頃

◎うた日記

○森於菟宛鷗外はがき、徂征日記、

陸軍軍医学校長の机(国立国際医療センター蔵)

7. 盛んな創作活動

◎青年

○東京方眼図、常磐会寄書(はがき)、

石川啄木書簡、双六盤、鷗外宛伊藤左千夫はがき

8. 栄光の晩年

◎「洪江抽斎」

○遺言書、デスマスク、哀悼寄書、鷗外愛用の印鑑・文具類

アンケート結果より

- ・大変充実した展示だった。貴重な資料も多く、とても満足した
- ・地域に根ざした展示はとても勉強になりかつ楽しい
- ・鷗外の素晴らしい功績に感動した
- ・日本の精神的支柱をなした一人ではないだろうか
- ・文豪、芸術家、医師、etc. 一人の普通の人間として終えたことに感を深くした

印象に残った資料ベスト5

1位 遺言書

2位 書簡・はがき

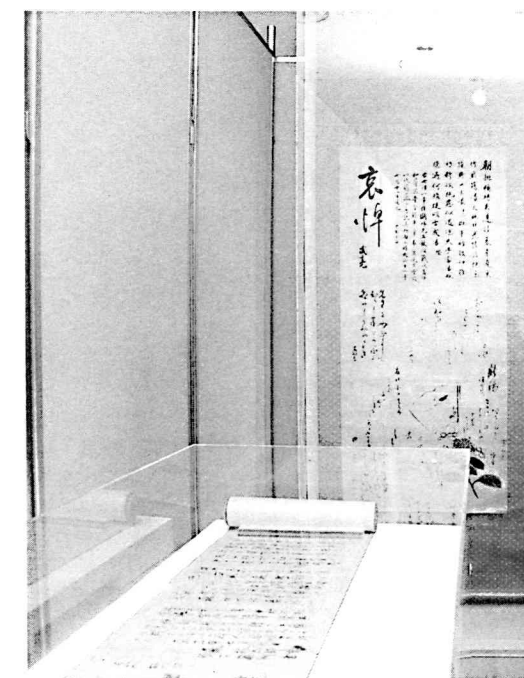
3位 哀悼寄書

4位 デスマスク

5位 石川啄木書簡 鷗外宛

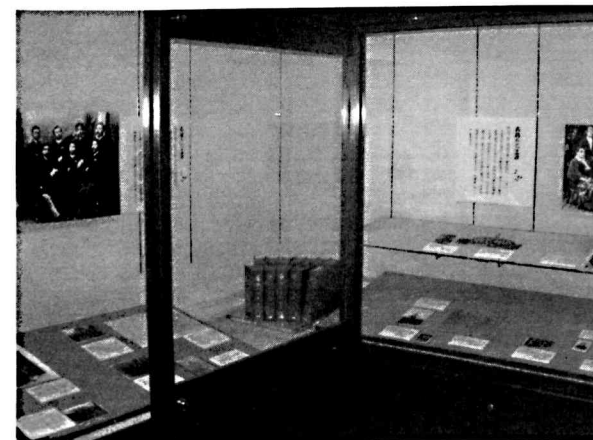


【会場風景】



【手前 遺言書 奥 哀悼寄書】

企画展示 所蔵写真でたどる森鷗外の生涯



会場：鷗外記念本郷図書館内 鷗外記念室

1月5日(土)～2月20日(水)

シビックセンターでの展示に併せ、鷗外記念室では、館所蔵の写真で鷗外の生涯を追う企画展示を開催しました。普段なかなか目にすることのできない貴重な写真が展示され、鷗外とその家族・友人の生活を垣間見ることができました。

森鷗外生誕140周年記念事業

二つの講演会にも「感激！」の声

鷗外は、文久2年1月19日に津和野で生まれました。その1月19日には、早稲田大学名誉教授の竹盛天雄氏による講演会、「鷗外—現代に問いかけるもの」を開催しました。

また、特別展の最終日1月26日には、鷗外の孫にあたる東北大学名誉教授森富(もりとむ)氏を中心に、「森潤三郎宛与謝野寛書簡の解説〈その2〉—『鷗外全集』編纂から『日本古典全集』編纂まで」を開催し、多くの方から「感激した」との声が寄せられました。



【竹盛天雄氏】

鷗外—現代に問いかけるもの

竹盛 天雄氏

(早稲田大学名誉教授、森鷗外記念会理事)

日時：平成14年1月19日(土)

14：30～16：00

会場：鷗外記念本郷図書館 3階閲覧室

参加者数 152名

〈講演の内容〉

鷗外作品を読むとき、現代の私たちはそこから何を学びとるか? 「私は私=オートノミー」という意識を常に持ち、作品の中にその精神を反映させた鷗外。個を失わず、自律・自治の精神で生きることの大切さは現代にも通じるのではないか。

〈アンケート意見より〉

- ・平易な語り口でしかも訴える力の鋭いお話でした
- ・すばらしい90分だった。酔いしれた
- ・「私は私」というテーマがよくわかった

森潤三郎宛与謝野寛書簡の解説〈その2〉

—『鷗外全集』編纂から『日本古典全集』編纂まで—

森 富氏

(東北大学名誉教授、森鷗外記念会名誉会員)

阿部 武彦氏 (仙台大学教授)

渡辺 善雄氏 (宮城教育大学教授)

日時：平成14年1月26日(土)

14：30～16：00

会場：生涯学習センターレクリエーションホール

(文京シビックセンター地下1階)

参加者数 160名

〈講演の内容〉

森富氏所蔵の未公開書簡を解説し、鷗外の末弟潤三郎が「鷗外全集」や「日本古典全集」の編纂にともないどのような役割を果たしたかが語られた。

〈アンケート意見より〉

- ・鷗外ゆかりの森富先生のお話に感激した
- ・講師3人の先生、内容豊かで頭に残る講演、文学談で刺激を受けた
- ・潤三郎の果たした役割の身内ならではの研究は貴重。森鷗外の思った以上の大きな存在か



【左から阿部武彦氏 森 富氏 渡辺善雄氏】

《文学講演会》の記録(第201回～第282回)

第1回～第100回は館報第72号、第101回～第146回は館報第85号、第147回～第200回は館報第108号に掲載されています。

回数	開催日	演 題	講 師	参加 人員	回数	開催日	演 題	講 師	参加 人員
201	平成 1.12.14	昭和歌謡論	評論家 平岡 正明	45	222	5.3.25	鷗外の「諸国物語」	東京大学教授 池内 紀	78
202	2.2.24	斎藤緑雨と鷗外	文芸評論家 小林 広一	36	223	5.6.5	森鷗外の衛生学	衛生学者 丸山 博	110
203	2.3.24	三島由紀夫 ～没後二十年からの視点～	文芸評論家 富岡幸一郎	78	224	5.8.3	芥川と私	作家 荻野アンナ	120
204	2.6.9	国際化時代の石川啄木 —日韓併合への道—	日本大学教授 岩城 之徳	91	225	5.9.18	明治41年の鷗外	作家 関川 夏央	50
205	2.7.24	心の中にもっている問題	詩人 長田 弘	71	226	5.10.23	こうも読める「雁」 作家の立場から	作家 高橋 昌男	50
206	2.11.1	鷗外の「舞姫」をめぐる	東京大学教授 池内 紀	84	227	5.11.30	鷗外と〈女性〉	神奈川県立 外語短期大学講師 金子 幸代	58
207	2.12.15	歴史文学の流れ	文芸評論家 尾崎 秀樹	65	228	6.2.23	正岡子規	法政大学教授 栗津 則雄	84
208	3.2.16	恋愛小説の系譜	文芸評論家 秋山 駿	75	229	6.3.24	武者小路実篤	千葉大学教授 大津山国夫	59
209	3.3.30	近代文学の「自我」と「関係」	文芸評論家 奥野 健男	86	230	6.6.4	私が「エリス」を見つけるまで	茨城大学教授 中川 浩一	115
210	3.6.8	鷗外の歴史小説 「おいさんばあさん」を中心に	東海大学教授 小泉浩一郎	89	231	6.7.5	与謝野晶子と 「君死にたまふこと勿れ」	文芸評論家 中村 文雄	91
211	3.7.20	歴史文学の流れ パートⅡ	文芸評論家 尾崎 秀樹	60	232	6.10.4	父 江戸川乱歩	立教大学 名誉教授 平井隆太郎	119
212	3.11.15	森鷗外と原田直次郎	東京大学教授 芳賀 徹	92	233	6.11.8	井伏鱒二を語る	文芸評論家 萩原 得司	52
213	3.12.14	大正文学について	文芸評論家 川本 三郎	81	234	6.12.7	樋口一葉・明治の女作家	作家 三枝 和子	106
214	4.2.13	「子午線の祀り」をめぐる	劇作家 木下 順二	152	235	7.2.4	森鷗外私論～鷗外・啄木・荷風、 三人の奇妙な関係	評論家 吉野 俊彦	161
215	4.3.24	森茉莉の世界 ～声を聴きながら～	詩人 白石かずこ	156	236	7.2.14	大江健三郎と現代の文学	作家 池澤 夏樹	130
216	4.6.6	津和野と鷗外	跡見学園 女子大学教授 山崎 一穎	133	237	7.6.3	日本近代洋画の歴史と森鷗外	東京芸術大学 教授 歌田 眞介	72
217	4.7.4	鷗外に宛てた葉書 —葉書が語るもの—	東京芸術大学 教授 中井 義幸	89	238	7.7.4	「断腸亭日乗」 荷風の日記が語る東京	評論家 川本 三郎	84
218	4.9.22	鷗外と医学留学生たち	作家 山崎 光夫	80	239	7.10.7	泉鏡花と鷗外	日本大学教授 笠原 伸夫	72
219	4.10.20	森鷗外と原田直次郎	美術史家 新関 公子	48	240	7.11.25	空白の文学史 (旧植民地の日本文学)	文芸評論家 川村 湊	55
220	4.11.9	観潮楼のはがきコレクション	東京芸術大学 教授 中井 義幸	70	241	8.2.10	鷗外の幻の雑誌を読む ～明治のドイツ語雑誌 「西から東へ」がめざしたもの	慶応義塾大学 教授 井戸田総一郎	105
記念	4.11.8	森鷗外展記念文学講演会 鷗外と明治	文芸評論家 江藤 淳	1000	242	8.3.12	文学と私 —千駄木の思い出とともに—	作家 逢坂 剛	111
		森鷗外展記念文学講演会 鷗外と東京	文芸評論家 吉本 隆明		243	8.3.23	ことばを超えるもの	作家 津島 佑子	157
221	5.2.26	自由独歩の森茉莉	文芸評論家 小島千加子	56	244	8.5.10	鷗外『即興詩人』の系譜学	コペンハーゲン 大学教授 長島 要一	94

回数	開催日	演 題	講 師	参加 人員	回数	開催日	演 題	講 師	参加 人員
245	平成 8.6.1	鷗外「小倉左遷」の謎	西南学院大学 講師 石井 郁男	95	267	11.7.23	グリム童話はほんとうに残酷か?	関東学院大学 助教授 吉原 高志	102
246	8.11.1	主人公というもの	作家 沢木耕太郎	275	268	11.11.5	鷗外と食	作家 嵐山光三郎	129
247	8.11.9	“朗読&トーク” 島田雅彦氏とともに	作家 島田 雅彦	128	269	11.12.4	幸田家の東京ことば	作家 林 えり子	76
248	8.12.7	日記にみる野上弥生子	評論家 中村 智子	99	270	12.2.19	「鷗外留学始末」の材料	東京芸術大学教授 中井 義幸	140
249	9.2.5	科学と文学	評論家 養老 孟司	256	271	12.3.18	読むことと書くこと	作家 車谷 長吉	145
250	9.3.22	鷗外の遺言書を読む —新資料を背景に—	跡見学園 女子大学教授 山崎 一穎	154	272	12.5.20	寺山修司 時代を創る表現者	青山学院女子 短期大学教授 栗坪 良樹	94
251	9.6.7	明治5年少年鷗外 上京記念写真の謎を追う	東京芸術大学 教授 中井 義幸	115	273	12.6.3	森鷗外の都市論について —特に「屋制新議」と東京市建築条例—	工学博士・東京都立 大学名誉教授 石田 頼房	65
252	9.7.12	淳之介と吉行家の人々	文芸評論家 山本 容朗	144	274	12.7.15	長く住んでいる所	随筆家 青木 玉	140
253	9.9.27	東京を幻視した作家たち —乱歩、荷風、鏡花、一葉たちの 描いた東京怪奇地図—	作家 森 真沙子	100	275	12.9.30	弾き語り「高瀬舟」 「夢十夜」より第一夜 (語り+11弦ギター)	一鷺 明伶	80
254	9.11.22	鷗外の坂	作家・ 地域誌編集人 森 まゆみ	171	276	12.12.16	源氏物語と森鷗外・・・ 古典研究者から見た近代	電気通信大学 助教授 島内 景二	140
255	9.12.6	立原道造と堀辰雄と『四季』	立原道造記念館 館長 堀 多恵子	119	277	13.2.3	鷗外小倉左遷説は消えたか	跡見学園 女子大学学長 山崎 一穎	148
256	10.2.14	「普請中」のベルリン 1887～8年の鷗外住居考	跡見学園 女子大学助教授 神山 伸弘	64	278	13.3.17	歴史小説の懐	東京工業大学 大学院教授 山室 恭子	92
257	10.3.20	新しい歌をうたおう	作家 鈴木 光司	84	279	13.5.18	教科書の中の漱石 —「野分」から「心」まで—	青山学院女子 短期大学助教授 佐藤 泉	84
258	10.6.6	—鷗外をめぐる人々— 父・森於菟	東北大学 名誉教授 森 富	183	280	13.6.2	『鷗外全集』の誕生 —鷗外記念本郷図書館所蔵 森潤三郎宛与謝野寛書簡の解説	東北大学 名誉教授 森 富	53
259	10.7.18	永山則夫の文学	文芸評論家 秋山 駿	88				仙台大学教授 阿部 武彦	
260	10.9.25	日本アンソロジーについて	文芸評論家 吉本 隆明	143				宮城教育大学 教授 渡辺 善雄	
261	10.11.7	—鷗外をめぐる人々— 森茉莉について	文芸評論家 小島千加子	93	281	13.11.30	一葉の四季	作家・ 地域誌編集人 森 まゆみ	102
262	10.11.21	森鷗外の日本回帰 —もう一つの世界—	コペンハーゲン 大学教授 長島 要一	71	記念	14.1.19	生誕140周年記念講演会 鷗外—現代に問いかけるもの	早稲田大学 名誉教授 竹盛 天雄	152
263	11.2.20	鷗外の恋人さがし —「エリス」は16歳?—	関西大学教授 植木 哲	113	282	14.1.26	森潤三郎宛与謝野寛書簡の 解説〈その2〉 —『鷗外全集』編集から 『日本古典全集』編集まで	東北大学 名誉教授 森 富	160
264	11.3.26	司馬遼太郎と本郷界限	文芸評論家 向井 敏	115				仙台大学教授 阿部 武彦	
265	11.5.14	「葺麻の家・三部作」ができるまで —思い出の作家たち—	作家 萩原 葉子	110				宮城教育大学 教授 渡辺 善雄	
266	11.6.5	—鷗外をめぐる人々— 三木竹二について	演劇評論家 渡辺 保	100					